
シュレッダー予備軍

志紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シュレッダー予備軍

【Nコード】

N4587Y

【作者名】

志紅

【あらすじ】

連載のスピノフや、色々短すぎる突発話。異世界ファンタジーや予告中心予定。

KAMITUKI

ピピピピピ、と、機械的な音がした。

それに小さくため息について、男は鳴りやまぬ小型機械を手取る。

「……もしもし？」

『ヴァンライド様でございますか？』

「ええ、そうです。」

『初めまして、私皇子付き秘書のトガネと申します。お噂はかねがね。』

「……どうされました？」

『いえあの、……実は……』

少し戸惑いを含んだ声で秘書が伝えてくる話に相槌を打って、もう一度ため息をついてから男は返事を返した。

「……了解しました。すぐにそちらへ向かいます。」

『ご面倒をおかけいたしましたして、申し訳ありません。——ところでヴァンライド様、』

今まで関わらずには来たものの、よくよく振られてきた話臭い切り出し方に男は小さく首を振る。

「……悪いですけど、政治的悪だくみには俺は協力できかねますよ。……ではこれで。」

『あ、ちょ……』

引き止める秘書の声を振り切るようにブツリと通話を切って、男は機械をテーブルに放り投げた。予想より早く時期が来たことにイラ

イラと髪をかき乱すと、ふと違和感を感じて手をおろす。

「……はああ……」

右手に絡まった茶黒に、男は深くため息を吐いた。

*

月の美しい夜だった。

部屋の中央の椅子に座り機嫌良さにふんふん、と鼻歌を歌うは……
金髪の青年——帝国第二皇子リトアイルである。月を見上げて目を細め、何かを待つように目尻を撫でてうつすらと笑う様は明らかに異様であった。けれどそれを指摘する者は既に人払いされたこの部屋にはおらず、青年の小さな笑い声だけが響く。

——青年は機嫌がよかった。何事も全力で楽しむきらいのある彼はそれが常ではあったが、それでも久々に“存在して”いられることに心が浮き立って仕方がない。月の光だけではない……。大いなる力が次第に増しているのを感じる。だからこそ、自分はいつもより早く顕現出来、そして……

「……おや、思ったよりお早いお越した。」

「……わざわざ待っていて頂けるとは光栄だな。」

かの高名なる黒騎士殿が、発現に気付けなかったのだから。

感じた気配と聞こえた声に青年は椅子から優雅に立ち上がり呟いた。振り返った先にいたのは、予想通り慚然とした表情のもう青年とは言い難い見た目の男で、青年はにっこりと微笑んでみせる。

「君はボクのお客人だからね、歓迎するのは当然さ。」

「……長居する気も、長居してもらう気も全くない。さつさと皇子の体から出て行け。」

剣呑な表情で、殺気を出しつつ青年を睨みつける男。同時に抜かれた剣は月の光を反射して眩しいほどに輝き、青年の顔を微かにゆがめて映し出していた。しかし青年はそんな脅しにも全く頓着せず、呑気に揚げ足をとる。

「それは正しくない言いようだよ？ボクはこの身と完全にリンクしている……一時的に封印することは可能なれど、出て行くなど無理だね。」

そして、と続けながら、青年はふわりと笑い、向かってきた銀の切っ先を交わした。かすかに音を発した空気に揺れた金髪が数本、はらはらと床に着地する。

「——もうすぐ“僕ら”はそれぞれの宿主の体を支配する。それは、
…どんなときか分かっているのだろう？大騎士シエル。“僕ら”に
唯一対抗しうる男よ。」

歌うように言った青年に男は齒噛みした。相手にすらされていない。
その事実もちろんあるが、それよりも青年が言った言葉に焦りを
感じていた。

「…やはり、…」

「ふふふ、そう、時は近い。その時事実にもっと近い君はどうするの
か、ボクは今から楽しみで仕方がないよ。」

「…余計なお世話だ。」

「あはは、そうだねえ。——…それにしても、シエル。」

楽しそうに笑った後微かに不思議そうに首を傾げ、いきなり話題を
変えた青年に男は眉を寄せる。

「君、本当にマメだよねえ。」

「…は？」

「いやいや、そこまでヒトが好きになわけでもなさそうな割に、随分
とマメにボクの封印に来るよなあと思ってね。」

「仕方がないだろう。…対抗出来るのは、俺だけなのだから。」

ため息を吐きつつそう言い捨てると、男は一瞬きょとんとした後す
ぐに吹き出した。——一体何が起きた。というか、どこか面白い所
があったのか。

「ぶ、く、ははは…！」

「何が可笑しい。」

「いやいや、——…君には、これから起こり得る事態を見過ぐす、という手はないんだなあ、と思つてねえ。」

「…黙れ。」

「くくく、…じゃあ今日は、君のその愛国心に免じて大人しく帰るとうしようかな。」

「……別に愛国心なんかでは、…というか、は？」

二度目のは、である。笑う青年が自分から帰ると言い出すことなど、これまで一度もなかったことだ。そんなに俺の発言がツボだったのか、と男は眉をひそめた。

青年はそんな男に構わず椅子に腰を下ろしたが、ふと思い出したように顔を上げる。

「ああ、そうそう…ボクは楽しければ何だっていいからね、これだけ穏和に行くけれど、」

何が穏和なものか、初対面で力試しと嬉々として襲いかかってきたくせにと男は思ったが、表情には出さない。元々鉄面皮で通っているし、青年は気付かなかったようだった。

「——他の連中はこうはいかないよ。彼らは忠誠心に満ち溢れてるからね。……ま、精々、」

頑張ることだと言つた怪しい気配が、段々と霧散していく。男はゆるゆると溜め息を吐いてから部屋からきびすを返し、秘書だと言つたトガネに魔法で文を飛ばした。さすがにあの会話の後で平気で話

せる太い根性はしていない。

ギィと音を立ててドアが閉まり、そこに寄りかかって男——シエル・ヴァンライドは静かに笑った。

「……言われなくても、」

“精々” 頑張つて見せるさともう一度笑って、男は王宮の長い廊下を歩いていった。

KAMITUKI (後書き)

つづく

…みたいな。

続きはありません(きっぱり)。

お初にお目にかかります。(前書き)

短編「Bad taste」の少し前の話です。

…ん？

少し綴りが間違っているかも…。

お初にお目にかかります。

「…ということなんだけど、」

理解出来るかい？と、“彼”は言った。

なにしろ寮に戻る途中にいきなり連れてこられた俺は、この状況の意味が分からない。

「…新しいタイプの拉致か？何やら地面が光ったようだったが…。」

「ああ、そうだったね。まずはこの世界のことを説明しないといけないわけだ。」

ぼそりと呟き続けられた内容は、とうてい信じがたい物だった。

「魔物、魔法、貴族…いったいどんなおとぎ話だそれは。」

「まあ君たちの世界は近代的なものね。ディファーマリアはかなり熱心だし。」

「…そこが一番の疑問なんだが、…ええと、」

ん？と言いたげな顔で首を傾げる男に、さすがの俺も言いよどむ。

それでも静かに口を開いた。

「神さま、…だと？」

「うん、そうだよ。僕はそこまで力の強い方じゃあ無いんだけどね。」…これは現実か？」

あっさり肯定されては逆に理解しがたい。しかめっ面をみると、彼はますます楽しそうに笑みを浮かべた。…まずそこからして疑問なんだ。彼が目の前にいるということその物が。

「…じゃあ、その自称神様が、」

何のために俺なんかを？

呟いた言葉に、彼は愉快そうに今度ははっきり声に出して笑う。なんかとはまたご謙遜だ、と言って。

「東藍民主主義共和国陸軍第四部隊曹長、通称“狂犬”くん…だったかな？君の武勇伝は全て、僕の頭に入っている。」
「……。」

揶揄するように自分の頭を指さしてから、相変わらず楽しそうに彼は続ける。

「“なんか”というには…余りに華々しくて血生臭い経歴だね？」

からかう視線にため息をついてから、俺も口を開いた。

「全部知られているというのはいいい気はしないが…まあこの際仕様ががない。で、あなたは俺にいったい何を求める？」

神だという存在に色々（何故言葉が通じるのかだとかここに連れてきた方法だとか）突っ込むのも野暮だと率直にそれだけを尋ねる。返ってきたのは頼みたいことがあってね、という簡潔な一言だった。

「…神様が、か？」

「だからこそさ。僕では干渉できない、いや…しちゃいけないことだね。“神々”の最大のタブー。だけど、君を介してならギリギリokかと、ね。」

「——なるほど、」

だからこそその自分か。ひそりと呟けばどうやら正解だったらしい。その通り、と頷かれた。

「…誰を？」

「いやあ、明確にこの人を、という訳じゃない
。」

ふわり、と彼が浮かべたのは優しげとは言い難い笑み。察しが良くて助かると目を細められ、神様ってこんなものなのかと俺は苦笑した。

「ストーリー通りに、“お話”が進むよう、僕が指定した人を……消してほしいんだ。」

明言。

危険かつ迂闊なことだ。これが俺の世界なら録音されて言質とられて脅されるだろう。それにしても随分月並みな言葉だとぼんやり考えていると、彼は更に続ける。

「異世界より来たる勇者の話を…知っているかい？」

—…きつと俺にこの絶対神からのお願い、否メイレイを拒否する手だてなど無い。出来ても多分犬死にで。

—ならばせめて。

「…聞いたことがないな。」

遠まわしの肯定に、悪趣味な神はその笑みを深めた。

お初にお目にかかります。（後書き）

実は薨のトリップには、神様たちの色んな思惑が絡んでいました。

そこまで書ききれませんが。

勇者様の受難（前書き）

短編「unfaithful」スピンオフです。

個人的にずっと書きたかった話。

勇者様の受難

巻き込まないで欲しいと龍斗は思う。

魔王を倒す旅の途中で仲良くなったドラゴンに乗せてもらい、放浪の旅に出てもうすぐ3日がたとうとしていた。…はいそこたいしてたってねえとか言わない。

龍斗はそもそも事なかれ主義である。そのおかげで実は魔王と対決すらしていないが、まあそれは丸く収まったし今の話には関係ないので置いておくとして。話を戻すと龍斗は出来れば魔王を倒すのも無事終わったことだし、後は一般人として何事もなく悠々自適に暮らしたいと思っていた。

——だが。

“リュート…もしかしたら気付いてたかもしれないけど、あなたこのままだと国の英雄として無駄に祭り上げられるわよ。”

さらりと編み物片手に言って教えてくれたのは、豪胆で知られる巫女…エルクだった。ぶっちゃけ周りの人達の中で一番このmあばばばば。

…それを聞いてああやっぱり、と思ってしまった。そんな空気は自分も少し感じていた。採寸させると言われたり、何やら急に絵師と面会させられぜひ肖像画をと言われたり、違う国のお偉いさんと対談させられたり。

衣食住を提供してもらっている身で、しかも実際魔王を倒した訳でもない。プラスしてもう一つ負い目のある龍斗は、仕方がないと受け入れていたのだが。…それが一生続くかもしれないとあらばまた話は別だ。

やらないと殺されかねない雰囲気だったから魔王討伐も引き受けたが、大してこの国に思い入れもない。加えて自分を慕っているような顔をしていた仲間たちも、きっと国から伝えられていたろうに何も教えてはくれなかった。…龍斗が好きなあまり、伝えたら龍斗はこの国を去ってしまうと考えた結果だろうとエルクは言っていたが、真実はわからない。

そうして割とあっさり旅立つ決意をした龍斗に、エルクは更に驚きの発言をしてくれて。

“私も連れて行ってくれない？”

――…巫女エルクがこの国の神であるディアスノア…俗に言う“万^ゼ能神”の妻だというのは、少し前に本人から聞かされた話である。その旦那と何かあったのだと…容易に想像はついた。

理由を聞くとエルクは渋々ながら教えてくれて。――…なんというか…当人たちにとってはそれで済ませていい話ではないのだろうか。

――これぞまさに、なんとかは犬も食わないと言う奴だなど、龍斗は思った。

「……はあ……」

ばちばちと目の前の焚き火がはぜる音を聞きながら、眠るエルクの横で頭を抱える。

実は昔、というか異世界に来る折りに、龍斗は神に会っている。その時やたら力説されたのが――エルクという巫女には絶対に手を出すな、ということだった。会ったというか正しくは夢の中に意志だけが流れ込んでくるような感じで、声だとか見た目だとかは知らないのだがまあその分更にエルク自慢…いや今思えば散々ノロケられてひたすらウザかったのを覚えている。

……だから初めてエリクに会ったとき、好みの巫女様がエルクと名乗ったのに一人撃沈していた訳だが。

その時は巫女だから神に愛されているのだらうと思っていたが…エルクの衝撃告白後、あれはそういうことだったのかと妙に納得してしまった。

——つまり、エルクに自覚はないが、彼女は旦那に相当愛されている。

だから多分、浮気というのも…三流メロドラマじみた理由があるのだろう。

例えば、エルクは若干冷めていてツンデレの気があるので、ヤキモチを焼いてほしかった、とか。それにしてもやりすぎだとは思うが…。

……。

うああああ！と叫んで髪をかきむしる。なんか色々とそろそろ限界である。悪いのは旦那の方だが、これ以上バカップル…否バカ夫婦の痴話喧嘩に巻き込まれたくはない。

だいたい非リア充男子にラブラブっぷりを逆に見せつけるんじゃないやねえ！と叫びたかったが、これ以上大騒ぎするとエルクが起きるのでやめておく。

「ああもう、ホント…別世界でも何でもいいから、助けてくれよ神様。」

ていうか旦那、お前神様の癖してエルクのこと見つけらんねえなら俺が説教してやろうかコラ、とぶつぶつ呟いて、けれどそれも次第

に虚しくなつて溜め息を吐く。

ゴロリと地面に寝転がるが、どうやら興奮しすぎて眠れそうにない。

畜生、と悪態を吐いて、元勇者は静かに寝返りを打った。

勇者様の受難（後書き）

勇者の事情がかなり入っちゃいましたが、まあ何となくあの二人の実態？を理解していただけたかな。

魔王に関してはまた後で別話としてあげます。というか書きたくてうずうずしております。

あ、ちなみに女性です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4587y/>

シュレッダー予備軍

2011年11月17日16時52分発行